

氏名（本籍） ヨシ ミヤ サチコ 好 宮 佐知子（東京都）
 学位の種類 博 士 （美 術）
 学位記番号 博 美 第 160 号
 学位授与年月日 平 成 18 年 3 月 24 日
 学位論文等題目 〈作品〉 彼方に光もの 此方に光もの
 〈論文〉 旅することと鑑賞すること

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	助教授	（美術学部）	工 藤 晴 也
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	野 口 昌 夫
（作品第1副査）	〃	教 授	（ 〃 ）	櫃 田 伸 也
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	佐 藤 一 郎
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	渡 辺 好 明

（論文内容の要旨）

本書では、人の精神的な旅立ちについて考えていきます。人がいかに精神面での旅立ちを獲得し繰り返してきたか、私自身の体験と作品を取り巻く世界や感覚など、さまざまな例を取り上げながら綴る文章集の形をとっています。そして、それぞれの章に組み込まれた挿話や写真を手掛かりに、読者がそれぞれの世界に旅立つことができると願っています。2から4の各章の最後はそれぞれの章に関連した作品とそれにつわる文章とします。5は作品を創りながら浮かんで消えていった事柄とそれに伴う作品の章とします。

作品を創り出すには日々の生活の中でさまざまなことを感じて五感が刺激される必要があります。私は、いつもの風景が一瞬別のものに見えた時、今居る場所ではない別の世界へ旅立つことがあります。人は毎日「ここ」から「どこか」という、その人しか知らない場所へ旅をしています。別の場所へ旅立った時の光景を、絵画という世界に置き換えている私は、見る人にその世界をひと時でも感じてもらえたらと思っています。私自身の旅立ちから一つの世界が生まれ、その世界を他者が目にした時、また新しい旅が始まります（旅の始まり）。

人々が旅を欲し求めるのは、日常からの逃避が第一の理由だと考えます。人は、いつもと違う環境で、違うものを見、違う行動をしたい、と日々を過ごしています。しかし実際にどこか日常とは別の場所へ行かずとも、人は日常から旅立つ術を知っています。本を読み、音楽を聞き、絵画を見る、これらは五感を使い鑑賞するものです。そして、五感の中の一つを使ってそれぞれの世界を認識し、体感した時、その感覚は五感全てへと繋がり堪能できます。この時、それぞれの世界への旅立ちが達成されます。人は感覚だけでも旅をできるのです。同時に、鑑賞するということは旅することと同じ状態になれるということです。（1、旅を求めるころ）。

過去にイタリアへ旅をし、二〇〇〇年近く前の町の様子が今に息づくポンペイとエルコラーノを訪れました。火山の噴火で、直前まで営みが続いていた町が一瞬にして埋もれ、人も生活も時間も全て封じ込められました。当時この地を支配していたローマ人は、日常の中で常に感覚を楽しませるものを求めた結果、芸術性の高い壁画を数多く生み出しました。彼らの虚構と現実を自由に行き来できる精神が、室内をも庭園とし、見晴らしの良い窓としての壁画を生み出しました。どこに居ようとも、壁画を使って精神の旅立ちを可能としていたのがローマ人です。そしてこの地で過去の産物を目の当たりにした私は、時を越え、過去のもの達が生き、存在していた事実を知りました。今現在に居ながらにしてかつての空の下を体感したのです。これも一つの旅と言えるでしょう。過去への感覚の旅立ちです（2、地中

海の空)。

外界と室内を繋ぐ唯一の接点は窓です。室内を拠点にした窓の役割はさまざまあり、たとえばステンドグラスは、窓から差し込まれる光を変化させ異空間を生み出します。その光を受けて人々は非日常へ旅立つのです。一方、窓から外を眺めた時、人は外界に広がる世界を知ります。室内から窓越しに見る外界は、外にいて見渡す世界とは異なって見えることがあります。画家にとって「窓」「窓からの眺め」とは特別な存在で、多くの画家がモチーフにしています。窓自体の魅力と、窓を通して見えてくる風景の魅力と、画家が繰り返し描くのは、窓が現実と非現実の世界の橋渡しをする存在だからかもしれません。(3、窓からの眺め)。

窓から外に目を向けると庭があります。庭とは人々が集い、遊び、くつろぎ、育てる場所です。人々の原風景としても捉えられています。人はそれぞれ違った庭を持ち、望み、憧れ、思う、幻影が「庭」という一つの概念に結びつけられ、抽象的な言葉として使われるようになったのではないのでしょうか。この庭を通し人々は精神を旅立たせてきました。

余分なものを削ぎ落とした枯山水の庭では、自分の感覚だけを頼りに自然の流れや時の流れをはかり、宇宙をも体感できるような精神の解放を求めました。目の前の現実世界を超えた、はかり知れない世界へ旅立つ装置となったのです。

一方、古代ローマでは、過去の旅の記憶を頼りに広大な別荘地を造り上げ、過去への旅立ちを望んだ皇帝もいました(4、庭)。

私はこうした日常からの感覚の旅立ちを成功させるために絵を描いています。人が絵画を鑑賞するにあたり、予備知識も先入観もない状態で絵画と対峙することが最も望ましく、それを自然な動作として行うには、作品は常に平静をもたらすものである必要があります。全ての人が身近な存在として絵画を捉えているとは限らないという前提の基、それでも目の前の世界に入った時、何かを感じ、または何も感じずとも、現実世界からの旅立ちが達成されるのです。ただ、眼前の世界に覆われ、現実が見えなくなった時が鑑賞の成功であり、作品の成立であると考えます(5、覚え書き〈絵画鑑賞〉)。

誰もが見たことのある光景を描いている私は、目で見て肌で感じ、この感覚が実感として残ったとき初めて作品にしようと思います。そしてこの時、私自身はどのような感覚に支配されるのか、これを解き明かすことが、鑑賞を求める、旅を求める人々の心を見つけることなのだろうと考えました。絵を描くことは目にした世界にもう一度旅立つことです。描きながら思い起こし、生み出される「あの時の光景」はもうあの時ではなく「たった今の光景」ともいえます。あの時の感覚を思い起こしながら新しい世界である「どこか」別の場所を創ることが絵を描く者の役割ではないのでしょうか。この「どこか」も現実の「ここ」があるからこそ生まれる世界です。なぜなら、人はたとえ「どこか遠く」へ行こうとも、必ず「ここ」へ帰ってくるからです。だからこそひと時の「どこか」を味わうために様々な装置を生み出してきたのでしょう。

人はそれぞれの感じ方を持っています。一つの感覚の刺激は、人が待ち得る全ての感覚に連鎖し、経験や記憶との相乗効果によって、全く新しいその人だけの世界を構築するのです。それ故に芸術を楽しむことができるのです。目の前にある作品を超え、鑑賞者の感性と合わさり、新たな世界が生み出された時が、作品の本当の意味での完成なのかもしれません(旅の終わりに)。